



Title	1895年の四都竹枝詞 : ベルリンとロンドンの歌
Author(s)	深澤, 一幸
Citation	言語文化研究. 2010, 36, p. 147-167
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11903
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1895年の四都竹枝詞——ベルリンとロンドンの歌

深澤 一幸

本論文要探討的是公元1895年這個世紀末的世界動亂時期，一個有中國古典素養的知識分子潘乃光，偶然出去海外，在文化燦然的歐洲四國首都裡看見甚麼，有甚麼感受，怎樣表現為詩歌。作為一個參照系，著者引用了日本的還是有中國素養的知識分子中井弘的詩歌，以便比較日中兩國知識人面對歐洲先進文化時的一些不同。本文主要分析了他們在柏林和倫敦的詩歌。

キーワード：海外竹枝詞、使俄草、漫遊記程

1

わたしはさきに「1895年の四都竹枝詞——パリの歌」（大阪大学大学院言語文化研究科「言語文化研究」第35号）で、潘乃光（1840～？）の「海外竹枝詞」のうちパリ滞在中の作をとりあげて注釈を加えた。本論文では、ベルリンとロンドン滞在中の作について読み進むことにする。

まずベルリンの歌を読もう。潘が随行した使節団の団長たる王之春（1842～1906）の日記「使俄草」巻三によれば、光緒二十一年正月十八日（1895年2月12日）、潘たちはパリから汽車でケルン・ハノーヴァーなどをへて、晩8時49分にベルリンに到着し、1日おいた二十日（14日）ベルリンを離れロシアに向かった。そして「使俄草」巻五によれば、ロシアからの帰途たる二月二十四日（3月20日）の朝7時に再びベルリンに到着、二十九日（25日）にエッセンから汽車に乗り、ドイツを離れた。

さて、潘のベルリン「竹枝詞」を読むための参考資料としては、パリと同様に、王の「使俄草」、そしてわが桜洲山人中井弘（1838～1894）の「漫遊記程」巻上「魯西亜土耳其漫遊記程」におさめる明治9年（1876）2月2日から8日までのベルリン日記が役立つ。

さらには、広東・番禺の人で、潘光瀛の息子、字は蘭史、号は剣士、また独立山人とも号した潘飛声（1858～1934）の「柏林竹枝詞」24首（「説劍樓集」不分巻に収める。顔精華らの序とともに、「西海紀行」「天外帰槎録」「遊薩克遜日記」「海上詞」などすべて十三種を収め、光緒二十四年刊）が参考になる。かれは、諸生で、光緒二十三年（1897）、欧州に遊び、ベルリンの開東書院の講席を三年間主宰したのち、帰国して香港の中華字報

館の主筆となった。南社の社友でもある。

2

それでは潘乃光の「海外竹枝詞」から「柏林」全九首を見ていこう。まず第一首。

未必君無自主權 未まだ必ずしも君に自主の権無きにはあらず
 衣租食税本天然 租を衣て税を食らうは本より天然なり
 一千五百雖論萬 一千五百 万を論ずと雖も
 限制吾王不要錢 吾が王を限制して錢を要めしめず

自注に「国中では毎年、徳王に一千五百万馬克マルクを供するも、妄りに費やす能わず」とある。当時の「徳王」はウィルヘルム2世（在位1888～1918）。「食税」は、「老子」第七十五章に「民の飢うるは、其の上かみが税を食らうの多きを以って、是こを以って飢う」とある。つぎは第二首。

庶民不議本同風 庶民は議さず 本より風を同じうす
 議院初開道亦公 議院は初めて開き道も亦た公なり
 祇惜國中分數黨 祇だ惜しむ 國中 数党に分かれ
 教民偏欲壓商工 教民は偏ひとえに商工を圧せんと欲するを

「庶民」の「風」については、「使俄草」巻三、正月十九日に「徳京ベルリンは民情は敦厚、俗尚は勤儉なり。貧富均しく七点鐘には必ず起く。地瘠す、故に街道は濶く、民儉し、故に日用は軽し」とある。「議院」帝国議会については、わが久米邦武編「米欧回覧実記」（田中彰校注、岩波文庫、第3冊、1979年12月）巻58「柏林府ノ記上」、明治6年（1873）3月12日に「日耳曼ノ帝位ハ、一千八百〇六年ヨリ、中絶セルコト六十四年ヲ経テ、去ル七十年十二月ニ、南北日耳曼ノ諸国、協同シテ、普王維廉プロイセン ウリヤムヲ推テ、日耳曼帝位ニ即シメ、因テ中央政府ヲ柏林ニ設ケ、聯邦各国ヨリ代議官ヲ出シテ、同盟會議ヲ設ケタリ、国民ヨリ代議士ヲ公挙シテ、国民會議ヲナス、是ヲ立法官トス」とある。

後半二句については、「使俄草」巻五、二月二十八日に、許景澄（字は竹簀）公使をトップとするドイツ公使館の参贊の金楷礼（名は理堂、アメリカ人。金楷理ともいう。Carl T. Kreyer. 1866年中国に来て、杭州でバプティスト派キリスト教の宣教に従事、1870年教会の職を辞し、上海の江南製造局で翻訳の任にあたる。のち駐露独公使許景澄にしたがい、公使館参贊となった。）が説明して「今其の国は分かれて四党と為す。一党（国民自由党）は李・梅リッベ メイの各旧王及び世家と為す。一党（保守党）は克魯伯クルップの諸巨商と為す。一党（中央

党)は天主教民と為す。一党(社会民主党)は諸工匠と為す。畢相は政を兼るに、頗る教民を裁抑し、尽とく其の産業を収め、工芸諸人を御し、厳しく条例を定むも、退くを告げて十年に及ばずして、諸務は漸く推行し難し。其の寿を称え像を醸する也、教・工の両党は大いに違言有れば、則ち教化の不純にして以って持久し難き也」とある。つぎは第三首。

非常勲業健精神 常に非ざる勲業 健やかなる精神
八十猶留退老身 八十 猶お留む 退老の身
舉國願爲司馬壽 国を挙げて司馬の寿を為さんと願う
三月初一是生辰 三月初一は是れ生辰

この詩は、絶大な人気を誇る宰相の「司馬」ビスマルク(1815～1898)をうたう。王之春も「使俄草」巻三、正月十九日に「今毛奇龍特は已に歿す。俾司馬(一に畢士馬克に作る)は近ごろ位を退くと雖も、依然として国事を忘れず。普魯士は日耳曼列邦の一、其の幅員は中国の一省にも敵わざるを以って、而して三十年、丹を敗り奥を敗り法を敗り、遂に強国と為り、英俄と抗衡するは、皆な俾相経営の力也。俾相の国計を籌画するは、純ら覇術を用い、殆んど管(仲)・商(鞅)一流の人物に係る。民は微かに其の繇征を怨むと雖も、而して仍お其の智略に服す。其の国中に入るに、整齐厳肅、方に興りて未まだ艾まざる氣象有り」とのべ、「夜、柏林に入る」詩でも「樽前に僉な説く 俾司馬、羨煞す他邦の柱石の臣」と感嘆する。

また巻五、二月二十七日(3月23日)でも「復た行くこと点半鐘、深好森鎮の俾思馬克(一に畢司馬に作る)の住宅の伊邇くに至る。金楷礼云う、「今から距たること九日、即ち西曆四月初一日は、八十の寿辰たり。徳民は争いて金銭を醸す、銅像を鑄し紀功坊を立てんが為なり。其の七十寿辰の時、畢相の父の旧有せる田業、値い一百五十万佛郎、中国の銀五十万両に合するに、賭敗せるに因りて、悉ごとく売去を行えり。徳民は其の国に功有るに仍お貧しきを以って也、為に貲を集め、尽とく故業を贖回す。今復た此れ有るは、亦た民情の愛戴を見る可し」とあり、「徳相畢司馬の宅を過ぐ」詩でも「門を過ぎて入らず 空しく洄溯し、想見す 英雄の角巾を露わすを」とおさめる。

また、わが「米欧回覧実記」巻58「伯林府ノ記上」、3月15日には「夜外務宰相「ビスマルク」侯ヨリ招宴、「ビスマルク」侯ハ、一千八百十五年四月一日伯林府ノ出生ナリ、「グッチレセン」ノ学校ニテ、法律学ヲ学ヒ、又語学、交際学ニ達ス、三十三歳ニテ、国会ノ議員ニ挙ラレ、三十六歳ノ時ヨリ、仏国ノ在留公使トナリ、四十四歳ノトキヨリ、露国在留公使ニ転任セリ、千八百六十一年、当日耳曼帝維廉第一世ノ代トナリ、再ヒ仏国ノ在留公使トナリ、巴黎ニ使スルコトニヶ月、両国ノ間ニ往来セルトキ、已ニ暗ニ国勢ヲ権衡シ、政略ヲ用フルノ志謀ヲ回シタリ、六十二年ノ九月ニ、外国事務長官、兼内閣総裁ニ登用セラレ、帝ヲ輔佐シテ、其志ヲ伸ヘ、六十四年ニ噓馬ヲ破リ、独逸ノ両国ヲ復シ、六十六

年ニ^{オーストリア}奥国ヲ破リ、之ヲ独逸ノ盟会ヨリ離シ、七十年ニ^{プロシヤ}仏国ヲ破リ、「アルサス」「ロルライ
ン」ノ地ヲ独逸ニ復シタリ、此侯ノ威名ハ、方今世界ニ轟キテ知ラレタルカ如シ」とのべ
る。つぎは第四首。

層樓傑閣氣崢嶸 層樓傑閣 氣は^{そうこう}崢嶸たり
近海雄風捲市聲 近海（じつはエルベ川の左岸にある）の雄風は市声を捲く
船廠多年媽德堡 船廠 多年 ^{マグデブルク}媽德堡
問名譯作女人城 名を問いて^な訳し作す 女人城と

この詩は、ベルリンの西にあるザクセン州の州都「媽德堡」マグデブルクをうたう。「使
俄草」巻五、二月二十七日に「復た火車に乗り、^{ブランデンブルク}勒爾徳を過ぎ、行くこと半点钟にして媽
德堡に至る。亦た女人城とも名づけ、巨鎮也。是の地は女を産すること最も多く、^{ドイツ}徳人の
凡そ婦を娶らんと欲する者は、多く是処に至りて娶り帰る。西例として、各城は皆な一物
を建て、即ち以って其の城に名づく。此の城は初建せし時、一婦人を鑄て其の上に立つ。
故に今多く女を産すと云う」とある。たしかに、今のマグデブルク市の紋章は、城壁の上
に立つ婦人を画いている。また「米欧回覧実記」巻55「^{プロシヤ}普魯士国ノ総説」にも^{サヘン}薩撒州を
のべて「首府「^{ベルヒ}マクテ」堡ハ、人口八万五千、羊毛麻織ノ名所ナリ、伯林ヨリ^{ボヘミヤ}薩撒波希米
ニ赴ク路線ニカハリ、繁昌ナル街地ナリ」という。つぎは第五首。

時様名花阿吉顛 時^{はやり}様の名花 ^{オルヒデーエ}阿吉顛
陰陽分種應時鮮 陰陽に種を分かち時に^{あざや}応じて鮮かたり
波羅蕉子相烘托 ^{パイナップル}波羅蕉子 相い烘托す
澹雨微雲二月天 澹雨微雲 二月の^{そら}天

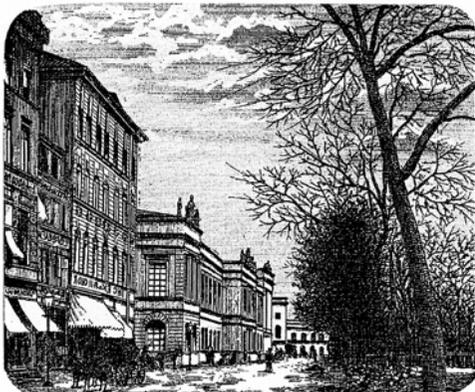


図1 ウンター・デン・リンデン大通り（「回覧実記」巻57）



図2 ウンター・デン・リンデンのフリードリッヒ2世像
（「回覧実記」巻57）

自注に「西俗は此の花を以って第一と為す」とある。その「阿吉顛」は、独語Orchideeで、洋蘭の花。「陰陽」は、地生と着生という種の相違だろう。「波羅蕉子」は、「柏林竹枝詞」第7首に「華筵香露 葡萄を酌み、波羅を^ま撃きて雪糕を醸す」とある「波羅」がパイナップルなので、やはりパイナップルをいうだろう。あるいは芭蕉やら蘇鉄の実を誤解したか。なお「柏林竹枝詞」第4首は、この詩よりひと月後「三月」のベルリンの街路、おそらくは菩提樹の並木道がつづき、両側に歴史的建造物が立ち並ぶウンター・デン・リンデン大通り、をうたっている、

層層樓閣白如霜 層層たる樓閣は白きこと霜の如く
 夾道新蔭拂緑楊 道を夾む新しき蔭は緑楊払う
 最是濃春三月好 最も是れ濃春三月が好るし
 滿城開放紫丁香 滿城に開放す^{ライラック} 紫丁香

「紫丁香」はライラックで、ベルリンでは5月ごろ街中に薄紫の花が咲き乱れる。つぎは第六首。

種花容易養花難 花を種^ううるは容易にして花を養^{かた}うは難し
 十八花農接替看 十八の花農 接替して看る
 富貴神仙克鹿^{クルップ}ト 富貴なる神仙 克鹿ト
 生成錦簇與花團 錦簇^{きんぞく}と花團とを生成す

自注に「住宅は大いに山荘の勝を擅いままにす」とある。この詩は、プロイセンの炭鉱町エッセンにおいてフリードリヒ・クルップ (1787～1826) がはじめ、長男の「大砲王」アルフレート・クルップ (1812～87) が確立した軍事産業の大会社クルップの社主の1873年に建てた豪邸ヴィラ・ヒューゲル、とくにその花園をうたう。当時の社主は、第3代フリードリヒ・アルフレート・クルップで、夫人はマルガレーテ、娘はベルタ。第四句は「花團錦簇」の成語をふまえ、色とりどりの花々が艶やかに咲き誇るさまをいうが、もとは宋の「景德伝灯録」巻17「洪州雲居道膺禪師」の条に「設^た使^とい^あ花^あを^あ攢^め錦^めを^あ簇^め、事^あ事^あ及^あび^あ得^あ、一^あ切^あ事^あに^あ及^あび^あ尽^あく^あす^あと^あも、亦^あた^あ只^あだ^あ了^あ事^あの^あ人^あと^あ喚^あび^あ作^あす^あの^あみ^あ」とある。

そして、「使俄草」巻五、二月二十八日には「卯正一刻 (午前6時15分)、^{ドルトムント}に^{いた}抵^り、慢車に換えて約两点余鐘、^{エッセン}愛森に抵る。廠主の樹林及び住宅在り。松柏の茂密せること、約長さ^{ばか}里許り。廠中の木料は皆な此の地^{ライ}に^ン取^る。来^{ライ}因^ン河^にに^近し。其の南に温水の流入する有り、天気は和煦にして、他処に勝る。愛森一鎮は煤鉱甚はだ多し。四鉱の^{クルップ}克魯伯廠に属する有り、日に四千噸^{トン}を出^す可^く、該廠の用^をを^敷す^に足^る。・・・廠主の住宅は周囲数里、閑敞なるは王宮に比ぶ可し。鎮の前後は皆な工人の居る所にして、亦た廠主の房産なり。

四山環拱し、霧として佳城の若し。哈^{こうこ}唔たる小河が右旁従り折れて境に入り、亦た殊に佳勝たり。廠主は事^お冗く、尚お柏林に在り、其の馬^マ單^{グム}（マルガレーテ）が二小女（ひとりにはベルタ）と偕に出で見みゆ（馬單は太太を詛言する也）。飯後、馬車に乗り其の花園に遊ぶ。並びに玻璃^{ガラス}を用いて室罩と為し、霜雪を避く。下は鉄^{てつ}箆^{びや}（鉄製の筒）を用い、温水を以つて灌入し、凍壊を免れ俾^しむ。葡萄は累累として正に実を結び、珠を懸けしが如し」とある。

ところで、わが桜洲山人も王之春たちと同様のもてなしを受けたようで、「漫遊記程」巻上、明治9年2月4日には「朝七時、エツセンニ達ス。汽車場ニ到レハクルツプ氏（アルフレート）ヨリ逢迎ノ馬車来ルニ会シ、二子ト共ニ「エツセネルポーフ」ト云ヘル旅舎ニ泊ス。・・・今タクルツプ氏ノ寓居ニ招待セラル。深津、渡邊（洪基）、ペヤノ三氏及ヒ他ノ製場ノ諸人ト共ニ馬車ニテ雪ヲ侵シ旅舎ヨリ一里許其寓居ニ到ル。左右深林蹊ヲ夾ミ景色極メテ幽致ナリ。人家稀ニシテ閑雅ノ模様筆真ヲ写ス可カラス。寓居ハ山ノ半腹平坦ナル所ニアリ、家屋ノ製^{ローマ}羅馬ノ築造ニ模仿セリ。クルツプ氏ト握手礼了ツテ深津氏ノ伝訳ヲ煩シ、予カ今日初メテ相遇フノ喜ヒヲ述へ、且翁ノ忍耐能ク此大業ヲナセシヲ賞美セリ。翁年七十有余ニシテ、矍^{かくしゃく}矍ナル事壯夫モ及ハス。常ニ綽々タル態度ヲ具へ、客ヲ好ミ談話ヲ喜フ。」とのべる。そして社主クルツプ氏と茶・ビール・たばこを交えた楽しい語らいの後、クルツプ氏の求めに応じて次のごとき竹枝詞を贈呈した。

製鐵之名耳已聞 製鉄の名は耳已に聞けり
 豈圖今夕共相親 豈^{はか}に図らんや 今夕 共に相い親しむとは
 翁年七十尚矍矍 翁は年七十なるも尚お^{かくしゃく}矍矍たり
 忍耐如君有幾人 忍耐すること君の如きは幾人か有る

また「米欧回覧実記」巻56「普魯士西部鉄道ノ記」3月8日にも「是ヨリ「クロップ」氏ノ宅ニ延^{まね}キテタ饌ノ享アリ、宅ハ場ヲ離ル十数町ノ野ニアリ、河水ニヨリ、岡上ニ兀然トシテ築キ起ス、尚造當中ニテ、其規模壮大ナレトモ、未タ全豹^{ぜんびょう}ヲミルニヨシナカリキ」と記述する。つぎは第七首。

天地爲爐百鍊鋼 天地を炉と為し百たび鋼を錬り
 忍將利器使人傷 忍^もくも利器を將つて人をして傷つけしむ
 攻堅保險無長策 堅きを攻め険しきを保つに長策（すぐれた策略）無きも
 欲顯神通便擅長 神通を顕わさんと欲すれば便ち擅長（思いのまま）なり

自注に「各国の砲廠は克鹿^{クルップ}トを以つて首と称す」とある。この詩はクルップの大砲工場から生まれる大砲の恐るべき性能をうたう。第三句の「攻堅」は他国の堅固な防御を攻め、「保險」は自国の危うい防衛を保つ。第四句の「神通」は、仏教の高僧が修行で獲得する

ような何でもできる神通力、つまり他国と隔絶した強大な力、クルップはそれを自在にあやつる。南朝梁「高僧伝」巻9「仏図澄伝」では、石邃が神異を現わす仏図澄を「和尚は神通」と感嘆する。

また、上海発行の新聞「申報」1884年5月9日掲載の「克虜伯炮廠詳誌」には、クルップ大砲の威力をのべて「新たに極大の砲を造り、其の砲弾は径は英尺の一尺、重さは半墩。此の弾は英国の極大極堅の鉄甲船を六里の外に洞穿す可し。英国の極堅の鉄甲船は、其の鉄甲の厚さ二尺二寸、船身の木厚は一尺五寸、而るに該砲は以って撃ちて之を穿つ可し。其の力は何如んぞや」と感嘆する。

なお、クルップの大砲の解説書については、光緒の初めにすでに「克虜伯砲説」四巻「砲操法」四巻「砲表」六巻、ドイツ軍政局原撰、アメリカ金楷理訳、李鳳苞（駐独公使）筆述、として、上海の江南製造局から出版され、ほかに「克虜伯」の「攻守砲法」「砲彈造法」「餅葉造法」「砲準心法」も出版された。そして張之洞の「書目答問」巻三、子部兵家にも「新訳西洋兵書五種」の一種として記載されている。

そして「使俄草」巻五、二月二十九日に「飯後、馬車に乗り、愛森、一名煙囪、に至る。其の地に各廠の煙囪の多きこと林の如きを以て、故に之に名づけし也。廠は凡そ数十百子所、其の鋼を鍊る・模を造る、各おの分地有り。……竊かに謂えらく、西人は近日武備を講求し、攻を為し守を為し、余力を遺さず。此れが堅きを攻むるの具を為せば、則ち彼れは抵禦の法を為すを求む。彼れが抵禦の法を求め得しに追ふや、而るに此れは復た別に攻破する所以の用を求む。総べて地を画して自から止まるを肯んぜず」とある。なお王之春は「克魯伯砲廠を閲す」詩の冒頭にも「機械叢生して天地窄く、衣裳を重んぜず兵革を尚とぶ。精刻 豈に復た余地の留まるあらんや、奇巧 更に創る 克魯伯」とうたう。

また、わが桜洲山人も「漫遊記程」巻上、2月4日に「二子ト製鉄場ニ到リ、クルツプ氏ノ胄子及ヒ附属ノ人々ニ邂逅シ、海軍生徒深津生モ来リ会シ、共ニ製砲場中ヲ巡覽ス。其宏大ナル驚クヘシ。今ヲ距ル五十年前クルツプ氏嘗テ此邑ニ興起シ、勉力職ヲ励ミ漸次ニ如此大業ヲ成就シ、其名ヲ天下ニ縦ニス。予英地ニ在リ、各所ノ鐵工場ニ至リシモ未タ曾テ此地ノ独リ其趣ヲ異ニシ、一種新發明ノ此ノ製鉄ニ髣髴タルモノヲ見ス。蓋シ比ナシト云フテ可ナリ」との感想をのべる。そして「米歐回覽実記」巻56「普魯士西部鉄道ノ記」3月7日には「大砲ハ「クロップ」氏ノ新式、甚タ精良ニテ、方今其右ニ出ルモノナシ、「クロップ」氏ノ鋼鉄ヲ練成スルニハ、西班牙ヨリ一種ノ鉄ヲ掘出シ、之ヲ參和スルニヨリ、其質堅剛粘韌ニテ、無双ノ砲材ヲナス、他ノ諸国ノ及フ能ハサル所ナリ」とある。つぎは第八首。

拓地仍從合衆看 地を拓くは仍り合衆從り看る
 人人尚武學兵官 人人は武を尚とび兵官を学ぶ
 嚙奇已逝畢公在 嚙奇は已に逝くも畢公は在り

固國猶同磐石安 国を固むるは猶お磐石の安きに同じい

自注に「^{ドイツ}德意志は自主の国と雖も、然れども国は亦た衆を合して成る」とある。「使俄草」卷五、二月二十四日には「^{プロイセン}德意志は、本名は普魯士、^{ゲルマン}日耳曼合衆国の一なり。・・・^{ウィルヘルム}威廉第一が位を嗣ぐに及びて、^{ビスマルク}俾司馬を任用して相と為し、^{モルトケ}毛奇を将と為し、奥を伐ち丹を伐ち法を伐ちて之を敗り、奥国共主の名を去りて、日耳曼の列国をして共に普を推して共主と為らしむ。因りて改めて德意志と号す」とある。そして、1800年生まれのモルトケ将軍は、4年前の1891年に逝去していた。

また「米欧回覧実記」卷55「普魯士国ノ総説」にもプロイセン人の気性をのべて「其^{よく}能繩墨ヲ守リテ、勲励スルノ性ヨリ出テ、武技ヲ鍛練シ、兵ニ節度アリ、能ク難ニタヘ、戦ヒニ勇ニ、勝敗ニ色ヲ変スルナク、以テ威力ヲ伸ヘテ、今欧洲ニ勇名ヲ轟カセリ」という。つぎは第九首。

洋樂凄清跳舞場 洋樂は凄清たり ^{ダンスホール}跳舞場
 成群各自逐鴛鴦 群を成して各自 鴛鴦（男女のカップル）を逐う
 沈腰太瘦不堪抱 ^{しんよう}沈腰は太はだ瘦せて抱くに堪えず
 懶向章臺學楚王 章台に向かいて楚王を学^{ものう}ぶに懶し

「沈腰」は、梁の文人^{しんやく}沈約の老病で瘦せ衰えた腰困だが、ここではきつく締めつけた美女のウエストをいおう。そのような腰では、抱けば折れてしまいそう。「章台」は春秋時代の楚の離宮、「楚王」は細腰を好んだ楚の靈王で、後漢ごろのうわさに「吳王は劍客を好み、百姓は創痍多し。楚王は細腰を好み、宮中は餓死多し」とあった。そのような細腰を好むのは「懶」ものういというからには、この夜の舞踏会にやって来た婦人たちの腰は、それほどきつく締まっていなかったのだろう。

この詩の背景としては、「使俄草」卷五、二月二十八日にクルップ邸での晚餐をのべて「夜、^{クルップ}克虜伯夫人（マルガレーテ）は各官紳仕女を招同して大餐せしむ。列坐するもの四十余人。酒炙の盛を極む。遠くより^{オーケストラ}音楽の全部を召く。席散じて、群れて相い跳舞し楽しみを為す。継いで復た男女は対舞す。行列は整飭にして、殊に法度有り。亦た西人礼樂の大意^{うかが}を覘う可き也」とある。

3

つづいては、ロンドンの歌を読もう。王之春の日記「使俄草」卷五によれば、ロシアからの帰途、ドイツに滞在した後、光緒二十一年三月壬申朔（1895年3月26日）、王之春の一行はオランダで乗船した「上海輪」でイギリスの東南岸に到着、2時間ばかり汽車に乗って、

朝8時ごろロンドンに到着し、三月初四日（3月29日）朝9時、ロンドンを発ってパリに向かった。つまりその滞在時間は4日間だけで、きわめて短かったのである。

さて、潘のロンドン「竹枝詞」を読むための参考資料としては、王の「使俄草」のほか、やはりわが桜洲山人中井弘の「漫遊記程」巻下「附録」におさめる「龍動」をうたった数首の竹枝詞がある。

さらには局中門外漢なる者が「戯れに草」し、最後に「光緒甲申（十年、1884）秋九月」と「自から識」し、「観自得齋」が光緒十四年（1888）に刊行した「倫敦竹枝詞」一卷、100首（徐士愷輯「観自得齋叢書」に収める）がある。その巻末に付した光緒戊子（十四年、1888）二月の儀甫の跋にはいう、

国初、尤展成（侗）に始めて「外国竹枝詞」の作有り。其の時海禁は未まだ開かれず、但だ之を故籍に求むを知るのみにして、故に槃を扣き籥を捫でる（宋の蘇軾のエッセイ「日諭の説」に、日の姿は銅盤のようといわれて「盤を扣きて其の声を得」、鐘を聞いて日と思ひ込み、日の光は蠟燭のようといわれて「燭を捫でて其の形を得」、籥を揣って日と思ひ込む、と盲人の勘違いを述べるのにもとづく）の談有り。大瀛の道を通じて自り、聞見は日び新たなり。近ごろ海外吟を為す者有り、頗る能く彼の都の風土を叙述するも、顧って尚お略にして詳びらかなら弗る也。今年の春、観自得齋主人は局中門外漢の為る所の「倫敦竹枝詞」を出示す。其の詩は多きこと百首に至り、一詩一事、国政自り以て民俗に逮び、諸れを歌詠に形わさざるは罔し。時有りては雑うるに英語を以てし、雅魯嫺隅、詼諧は妙に入る。持論は間ま憤激に涉ると雖も、然れども医院・火政（消防）の如きも、亦た未まだ嘗つて其の立法の美没きにあらず、殆んど所謂の憎みて其の善きを知る者歟。属たま將に此の詩を以て梓に授けんとし、為に数語を後に識す。

「局中門外漢」は不明だが、第4首は1887年のビクトリア女王在位50周年の祝賀式典をうたうので、1884年に書き上げたとみるのは、疑わしい。そして「門外漢」を、この竹枝詞を出し示し刊行した「観自得齋主人」たる安徽・石埭の徐士愷本人とみる説もある。しかし「跋」に「雑うるに英語を以てし」とあるごとく、少なくともこの著者は少し英語を理解し、また郵便・電話・電灯・写真などの新奇な事物に興味をもっていた開明的な人物だったろう。

また、日本人の感想として追加したいのは、もと幕府の外国奉行、会計副総裁、維新後は向島須崎村に隠棲していた成島柳北が、東本願寺法主の現如上人から宗教事情視察の旅への随行をもちかけられ、明治5年（1872）9月13日に横浜から汽船ゴダヴェリー号に乗って出発し、フランス、イタリア、フランス、イギリスを回り、大西洋を渡って、明治6年（1873）6月1日にアメリカのニューヨークに到着するまでを記録した日誌「航西日乗」（明治14年11月から明治17年8月まで「花月新誌」に連載、ここは主に井田進

也校注「幕末維新パリ見聞録」岩波文庫、2009年10月による）である。そのうちのロンドン滞在中にうたった竹枝詞が参考になる。

4

それでは潘乃光の「海外竹枝詞」から「英都たる倫敦」全十首をみていこう。まず第一首。

地横南北島孤懸 地は南北に横たわり島は孤り懸かる
 英里量來逾二千 英里 量り来れば二千を逾ゆ
 除却園林街市外 園林街市を除却せる外は
 更無曠土與間田 更に曠土と間田と無し

前半二句については、「使俄草」巻五、三月壬申朔に「按ずるに、英吉利の本国は、地は三島に止まり、大西洋の海中に孤懸す。迤東の両島は相い連なり、南は英蘭と曰い、北は蘇格蘭と曰う。（英人は地を併して蘭と曰う）南北は約二千余里、東西は潤きは五六百里、狭き処は三四百里。迤西の一島は烏爾蘭と曰い、南北は約七八百里、東西は約五六百里」とある。つぎは第二首。

毎日陰霾不放晴 毎日 陰霾にして晴れを放たず
 一冬常在霧中行 一冬 常に霧中に在りて行く
 更兼遠近炊煙起 更には遠近に炊煙起こるも兼ね
 電氣無光蜃氣争 電氣は光無く 蜃気は争う

これも「使俄草」巻五、三月壬申朔に「倫敦は泰晤士江の上流に居る。・・・地は本もと寒多く、海中の温水の蒸す所と為り、気は溢れて騰上す。又た数百万家の煤を然くの煙は、絡繹として散ぜず。故に終朝常に霧に罩めらる」とある。さらに、よい注釈となる局中門外漢の「倫敦竹枝詞」第3首をあげれば、

黄霧迷漫雜黑煙 黄霧 迷漫として黒煙を雑え
 滿城難得見青天 滿城 青天を見るを得難し
 最憐九月重陽後 最も憐れむ 九月重陽の後
 一直昏昏到過年 一直に昏昏たりて過年（旧暦の新年）に到る

門外漢の注に「倫敦の居民は四百万戸、家家煤を焼き、煙筒は林の如し。一たび冬令に交わらば、閉塞して通ぜず。煙は凝りて散ぜず、日色は光無し。白昼も晦の如きは、異と

為すに足らず」という。

また、成島柳北「航西日乗」明治6年5月19日に収める「倫敦市上の作」二首の第1首にもいう、

汽車烟接汽船烟 汽車の烟は汽船の烟に接わり
 四望冥冥不見天 四望冥冥（四方一面真つ暗）として天を見ず
 忽地長風來一掃 忽地にして長風の来たりて一掃すれば
 倫敦橋上夕陽妍 倫敦橋上 夕陽妍し

つぎは第三首。

我來恰遇艷陽天 我来たるに恰も遇う 艷陽の天
 真面廬山現眼前 真面の廬山 眼前に現る
 五百萬人増戸口 五百万人 戸口を増やし
 豈惟鞞擊更摩肩 豈に惟だ鞞を撃ち更に肩を摩るのみならんや

前半二句については、「使俄草」巻五、三月壬申朔で王之春も「是の日は幸いに晴朗に値い、意興之が為に欣然たり」と喜びをのべる。「真面廬山」は、本当のロンドンの姿で、宋の蘇軾の「西林の壁に題す」る詩に「廬山の真面目を識らざるは、只だ身が此の山中に在るに縁る」とある。第四句の「鞞」こしきが「撃」打ちあい「肩」が「摩」すれあうのは、市街の繁華なさまで、「史記・蘇秦伝」に「車は鞞撃ち、人は肩摩す」とある。さらに王は「早に倫敦に至る二首」の一詩でも、

日出煙銷已放晴 日は出煙は銷え已に晴れを放ち
 飛輪捲地入山城 飛輪は地を捲きて山城に入る
 百聞一見殊驚喜 百聞一見 殊に驚喜し
 游福天生老眼明 游福は天生にして老眼明らかなり

とうたい、前半については「英京は尚お霧気多し。今は適たま開霽す」と注する。つぎは第四首。

車路先分上下層 車路は先ず分かつ 上下の層
 凌空穴地果精能 空を凌ぎ地に穴あけ 果して精能たり
 熙來攘往中同軌 熙として来たり攘として行き中は軌を同じゅうす
 稅務年年幾倍增 稅務は年年 幾倍にか増えし



図3 チャリング・クロス駅 (『回覧実記』巻22)

自注に「火車は或いは屋上・地下に皆な車路有り、分行して礙^{さま}たげ無し」とある。前半二句は、わが久米邦武編「米欧回覧実記」(田中彰校注、岩波文庫、第2冊、1978年10月)巻22「倫敦府総説」、明治5年(1872)7月14日にも「倫敦ノ市中ハ、天ヲ走ル車アリ、地ヲ駛^{はし}ル輪アリ、製作ノ奇工ヲ極メタリ」とあり、また巻42「巴黎府ノ記一」11月17日には「倫敦ノ街ハ、地下ノ鐵路アリ、地上ノ車道アリ、天上ノ鐵路アリ、人民モ亦三様ノ生理ヲナシ、日ニ棲^{せいせいこうこう}棲^{せいせいこうこう}徨徨タリ、石炭ノ烟白日ヲ薰シ、雨露モ亦黒キヲ覚フ」とある。さて「凌空」する鉄道の一例としては、「米欧回覧実記」巻22「倫敦府総説」、7月14日に「橋間ニ又鉄道ノ橋アリ、屋^{おくぼう}薨^{わう}ノ上ヨリ飛^{ワタ}互^り来^テ、河傍ノ駅ニ達ス、鐵路ノ下ハ、鉄ノ巨柱ヲ以テ支持シ、大路ノ上ハ、石ヲ疊ミテ彎^{わんこ}弧(「アルチ」)ヲナス、車輪ハ雷ノ如ク驟^{しゅうごう}轟シテ、人ノ頭上ヲ奔走シ、駅ヲ出テ駅ニ入ル、車ニ搭スル客ハ、蜂ノ如ク屯シ、車ヲ下ル客ハ蟻ノ如ク散ス」とある。また「穴地」した地下鉄については、あるいは1890年11月に開通した、テムズ河を通過してロンドン橋の北と南を結ぶ電車の地下鉄「チューブ」をいうかもしれないが、「倫敦竹枝詞」第2首には1863年に開通した蒸気機関車の地下鉄をうたっている、

十丈寛衢百尺樓 十丈の寛衢 百尺の樓
 並無城郭鞏金甌 並びに城郭の金甌を鞏むる無し
 但知地上繁華甚 但だ地上の繁華甚はだしきを知るのみなるも
 更有飛車地底遊 更に飛車の地底に遊ぶ有り

門外漢の注には「泰西の諸国は皆な城無く、英も亦た之の如し。通衢の下は皆な鏤空して甕洞^しを砌き成し、下には鉄軌を置きて火車を行かしむ」という。

また、成島柳北「航西日乗」明治6年5月19日の「倫敦市上の作」第2首にもいう、

頂上晴雷脚底烟 頂上は晴雷 脚底は烟
 一車入地一車天 一車は地に入り一車は天
 中間吾亦車中座 中間 吾れも亦た車中に座し
 驀過東西陌與阡 驀ぐらに過ぐ 東西の陌（東西の道）と阡（南北の道）とを

「地に入る」「車」は、煙を出す蒸気機関車の地下鉄で、「天」にのぼり雷のような轟音を出す「車」は、高架鉄道。そして「吾れ」柳北が「座」す「中間」地上の鉄道がある。つぎは第五首。

品茶跳舞復開筵 茶を品し舞を跳び復た筵を開く
 折柬須從三月先 柬を折るは須からく三月先に從るべし
 破得工夫來入會 工夫を破い得て來たり会に入るも
 還分盧後與王前 還た盧後と王前とを分かつ

自注に「凡そ客を請うに柬（招待状）を具するは、須からく三箇月前に在るべし」とある。第四句は、「旧唐書・楊炯伝」に「炯は王勃・盧照鄰・駱賓王と文詞を以て名を齊しくし、海内は稱して王楊盧駱と為し、亦た号して四傑と為す。炯は之を聞き、人に謂いて曰わく、「吾れは盧前に在るを愧じ、王後に居るを恥ず」と。当時の議する者も、亦た以て然りと為す」とある。さてまずティー・パーティーについては「倫敦竹枝詞」第12首に

銀燭高燒萬盞明 銀燭は高く焼かれ 万盞は明るく
 重樓結綵百花新 重樓 綵を結び 百花は新たなり
 怪他嬌小如花女 怪しむ 他の嬌小たる花の如き女
 袒臂呈胸作上賓 臂を袒わし胸を呈して上賓と作るを

とあり、門外漢の注に「泰西の茶会は家国の盛挙為り。大会は柬を發し客を請うこと一二千人に至り、小会も亦た数十人。会の大なる者は、層樓皆な綵綢を以て壁衣と為し幃幔と為し、五色の鮮花数千百盆は堆みて山の如し。大門自り以て層樓に至るまで、皆な錦氈を以て地に貼る。樓の上層は衆客相い会するの所と為す。客至らば、女は坐り男は立つ、其の俗然る也。樓の下層は食具、氷乳・加非・点心・各種洋酒の如き、を設け、長案を以て之を羅列す。坐位を設けず。男女は樓より下り、案に就きて自から取り、立ちて之を啖らう。主人の奉敬する礼は無し。蓋し主人は樓頭に立ちて賓を迎うるならん。賓の至る者は、魚貫して入り、雁行して進む。主人は寒暄する暇無く、亦た酬酢する暇無く、惟だ癡立し一たび握手する而已。上下に白燭数千支を燃やし、「燭は恭敬と為し、大事有らば電燈煤氣を以て貴しと為さざる也」と謂う。凡そ客の妻女有る者を延くは、必らず

並びに之を延く。其の俗として朝会筵宴大典は皆な婦人有り、「陰陽は一体、偏廢するを容れざる也」と謂う。婦女の来たる者は、皆な帽を脱ぎ、上衣を解き、両臂を袒わし、胸乳は畢とく露われ、胸前には鮮花一帯を懸く。婦人は則ち更に長裙を後に曳き、長さは丈^{ほか}許り。婦人の爵有る者は、髪上に^{こうがい}笄を加え、中国に用いる所の翠圍（大家の令嬢の華麗なアクセサリ）の如く然り。数千人は此こに来たり彼しこに往き、真に山陰道上、応接に暇あらざる（東晋の王献之の言葉「山陰道上従り行けば、山川は自から相い映發し、人をして応接に暇あらざらしむ」により、美しい景物が多すぎて見きれないことをいう）が如し。奇観なる哉」と詳説する。そしてダンス・パーティーについては、「倫敦竹枝詞」第13首に、

折柬延賓約夜期 柬を折り賓を延き夜期を約す
 弱男少女最相宜 弱男少女 最も相い宜し
 雙雙跳舞氍毹上 双双 跳舞す 氍毹（もうせん）の上
 道は婚姻正及時 道う 是れ婚姻 正に時に及ぶと

とあり、門外漢の注に「跳舞会の陳設款式は一に茶会の如く、凡そ男の未まだ娶らず女の未まだ嫁がざる者は皆な往く。握手して相い^あ晤わば、便ち跳舞を約す。若し両情が款洽せば、或いは^こ駕して言に出遊し、互いに其の性情資財を訪いて^と婚嫁を訂す」という。つぎは第六首。

鐵橋高聳氣蒼涼 鐵橋は高く聳え 氣は蒼涼たり
 疑是長虹架玉梁 疑う 是れ長虹の玉梁を架せしかと
 輕似轉圜須舉手 輕きこと轉圜に似て手を^ま挙ぐを須つ
 往來車馬費商量 往來する車馬は商量を費やす

この詩は、ロンドン塔の東側に接してテムズ河にかかり、タワー・ヒルと対岸のバーモンジーを結ぶ、前年1894年に開通したばかりの「石のコートにつつまれた鉄の骸骨」鉄骨を露出させず石壁で覆ったタワー・ブリッジをうたう。「使俄草」巻五、三月初三日に「尋いで一鉄橋を過ぐ、所謂の倫敦橋なる者也。橋は泰晤士江の上流を跨ぐ。樓坊四座矗立し、中は機輪を為す。橋は重きこと数十万^{きん}筋なるも、一人以って開合す可し。橋開かば則ち人は上従り過ぐ。複道は空を行き、采虹は双び落つ。今果たして諸れを実境に見たり」とあるごとく、橋は両岸からかかる各80メートルの吊り橋部分と中央60メートルの跳ね橋部分からなり、これをゴシック様式の重厚な2基の塔がささえる。第三句は、橋の開閉が一「挙手」ほどの手間だけで「轉圜」丸いものを回転させるぐらいに「輕」がるとできるというが、蒸気機関の動力で1100トンの跳ね橋が1分半で全開し、最多時には1日5回開

けたらしい。「商量」は、あれこれ考える。開橋時の混雑を避けようとして。つぎは第七首。

製造曾聞胡力樞 製造 曾つて聞く 胡力樞 ^{ウリッチ}
 船堅礮利啓鴻圖 船は堅く礮は利どく 鴻図を啓く ^{ほうす}
 神斤鬼斧應稱絶 神斤鬼斧 応に絶と稱すべく ^{まさ}
 萬五千人減得無 万五千人 減らし得るや無や ^{いな}



図4 ウリッチ風景 (『回覧実記』巻24)

自注に「工人の万五千人は、増有るも減無し」とある。この詩がうたうのは、ロンドン東郊、テムズ河下流南岸沿いの「胡力樞」ウリッチの大軍事産業地帯で、火薬製造所・砲架部門・火薬庫からなる王立兵器工場と戦艦を建造する王立造船所があった。「使俄草」巻五、三月初二日には「晨起き、(清国公)使館に至り、仰使(駐英公使の龔照瑗。字は仰蓮)に拝晤し、匆匆に一叙す。九点鐘に至り、楊虞裳(宜治)・徐堯塏(啓書)・洋参贊の馬格里(清臣)と偕に、往きて英国国家の製造鎗礮廠を觀る。廠は胡力樞と名づく、即ち其の地名を以て之に名づけし也」とあり、そこで「新式魚雷礮」「快礮」「各礮弾」などを詳しく観察している。そして王之春は「英国胡力樞船廠、並びに魚雷船商廠を閱す」る詩でも

君不見英廷設廠胡力樞 君見ずや 英廷は廠を設く 胡力樞 ^{ウリッチ}
 船形礮式群舉隅 船形礮式 群もて隅を挙ぐ
 萬五千人效鞞鼓 万五千人 鞞鼓を效し ^{ふいこ}
 霹靂響應山嶽呼 霹靂の響きは山嶽の呼ぶに応ず
 宋斤歐冶各有執 宋斤歐冶 各おの執る有り ^{おうや}
 衆聲無譁相奔趨 衆聲 譁びすしき無く 相い奔趨す ^{かま}

とうたう。「宋斤」は宋国特産の精良な斧、またそれを製造する工匠。「欧冶」は春秋時代の名高い刀鍛冶。いずれも、ここで働く職工をいおう。

また、わが「米欧回覧実記」巻24「倫敦府ノ記中」、8月8日にも、「英国武器ヲ製造スル所」「ウールウィツチ」を訪問しての感想を「全歐洲ニ於テ、造兵場ノ盛大ナルコト、此地ニ超ルモノアラス、其雄名ハ世界ニ轟ケリ」とのべる。つぎは第八首。

龍潭分出水晶宮 龍潭 分かち出だす 水晶宮
 百貨駢羅美在中 百貨 べんら 駢羅し 美は中に在り
 良賈深藏遊女雜 良賈 りょうこ は深く 藏 かく し遊女 まじ は雑り
 四時佳景不雷同 四時の佳景は雷同せず

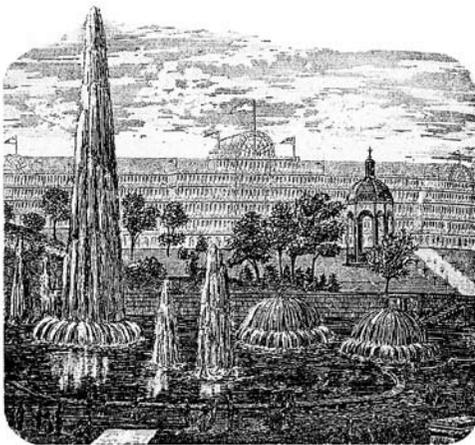


図5 クリスタル・パレスと噴水（「回覧実記」巻25）

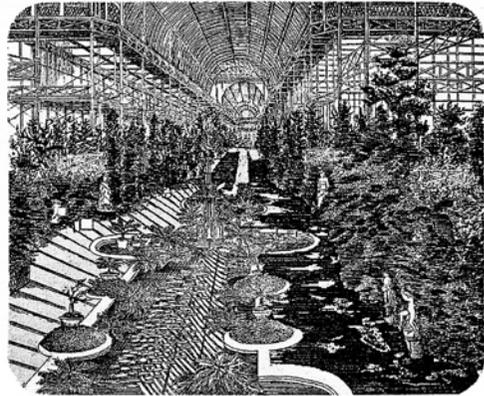


図6 クリスタル・パレスの内部（「回覧実記」巻25）

第一句の自注に「地名」とあるのは、「水晶宮」の所在地はもともと「龍潭」と呼ばれていたのだろうか。第三句は、「史記・老子伝」に「良賈は深く藏して虚なるが若し」商売上手はよい商品を無いもののようにしまいこむ、とある。この詩は、1851年世界最初の万国博覧会のおりパックストンの設計でハイド・パークに建てられ、のち1854年ロンドン南郊のシドナムの丘に移された鉄骨ガラス張りの建物「水晶宮」クリスタル・パレスをうたう。さまざまな植物の茂る屋内庭園、美術や建築の模型を陳列したエジプト館、ギリシア館、ローマ館、アルハンブラ館、イタリア館、ビザンチン館、中世館、ルネサンス館があった。

ここで参考のためにわが中井桜洲の「龍動」詩（「漫遊記程」巻下）をあげよう。

避暑園中日欲斜 避暑園中 日は斜めならんと欲す
 出乗肥馬與輕車 出でて乗る 肥馬と輕車と

詩人偏自耽清浄 詩人は偏えに自から清浄に耽り
 去看水晶宮裏花 去きて見る 水晶宮裏の花

桜洲の注は「水晶宮ハ府内ヨリ南方ノ郊外三里半ノ処ニアリ。故博覧場ノ趾ニシテ殿廊ノ長サ二百七十間半、高サ三十三間三尺、全体皆鉄ノ柱梁ヲ用ヒ蔽フニ玻璃（ガラス）ヲ以テス。内部ハ万国ノ物品ヲ網羅シ、各国有名ノ石像彫刻ノ妙及ヒ古代ノ建築等ヲ模造シ、或ハ万国ノ草木花実ヲ蓄へ、緑葉陰ヲナシ花香鼻ヲ薫ス。其外部ハ噴泉器ヲ設ケ池水ヲ貯へ、鶯鴨游泳、魚介飛躍シ、其内雜貨店及酒肆茶房百物具備セザルナシ。恐クハ武陵桃源モ亦百歩ヲ譲ルヲ覚フ」と要領よくまとめる。

また、成島柳北「航西日乗」明治6年5月15日にも、「高島眉山・乙骨兼三二子ト水晶宮ニ遊ブ。宮ハ玻璃ヲ以テ大屋ヲ架ス。全宮玻璃中ニ在リト謂フモ可ナリ。中ニ生魚數十種ヲ養フ。遠ク海潮ヲ汲ムノ労想フ可シ。油画・偶人（人形）・諸国産物、皆宮内ニ列ス。園池モ極メテ清絶ニシテ、噴水緑樹、景致太ダ佳ナリ。園中射の場有リ、弓箭本邦ノ物ニ類ス。蓋シ古技ヲ存セシナラン」という。

また局中門外漢の「倫敦竹枝詞」第72首は、当時最大の呼び物たるイベントで「都中ノ富豪」の賛助による毎夏の打ち上げ花火大会をうたっている、

五色光芒火亂馳 五色の光芒 火は乱れ馳せ
 水晶宮裏鬪新奇 水晶宮裏 新奇を闘わす
 樓臺車馬眞如繪 楼台 車馬 眞に絵の如し
 瞬息煙銷火滅時 瞬息に煙銷え火滅する時

門外漢の注に「倫敦を去ること四五十里に水晶宮有り。周廻は五里可かり、四面は皆な園林、中に五層の楼を建て、全て玻璃を以って瓦と為し、其の長さは百余丈可かり。楼の左右には皆な一塔十三層有り（前庭の十の池には約一万二千本の噴水があり、その給水のために建てられた約86.8メートルの二本の巨大な塔）、亦た玻璃を以って瓦と為す。楼前には月台を為し、石級は数十歩。台の下は一片の隙地にして、東西各おの一小池、晩間に煙火を放つ所と為す。其の煙火は楼台の若き者有り、車輪の若き者有り、池中自り放出し直ちに雲際を上りて繁星の五色を噴射する者有り、瀑布湍流の若き者有り。奇形詭制、名状す可き莫し」とある。

そして花火の詳細は、「米欧回覧実記」巻25「倫敦府ノ記下」、8月17日、水晶宮「キリスタル・パレイス」の全容についての詳細きわまる叙述の後に、「七彩ノ星ハ空ニ乱レ、五色ノ光ハ水ヲ染メ、金蛇地上ニ闘ヒ、炎輪階砌ニ転ス、七月ノ並ニ出ルハ、「マグネシム」ノ光リナリ、巨人ノ象ヲ現スハ、台花火ノ設ケナリ、其他諸鉞金ノ精華ヲ焼キ、各色ノ光ヲ放テハ、満苑ノ浄沙、清水、ミナ色ヲカフ、白光ニハ嫦娥（西王母の不死薬をぬすみ飲み、

月中に奔った仙女)ニ従ヒ、月宮ニ至ルカト疑ヒ、^{たちま}乍チ紅光ニ変スレハ、赤鳥(日中に住まう三本足のからす)ノ日球ニ飛翔スルヲ訝^{いぶか}ル、^{にわか}驟ニ碧光ニ改マレハ、満庭水ノ如ク、洛神(洛水の女神たる宓妃)ノ出テ、^{いで}湘妃(舜の二妃たる娥皇と女英。舜が崩じたとき、後を追って湘水に投身し、湘水の女神になった)ノ^{しつ}瑟ヲ聞カ如シ」と活写する。つぎは第九首。

對來金錶漸三更 金錶に(時刻を)對^{あわ}せ来れば漸やく三更(深夜12時ごろ)
 有女如雲結伴行 女有りて雲の如く伴を結びて行く
 不許東風管閒事 東風の閒事(男女の遊び事)に^{かか}管わるを許さず
 留將明月照多情 明月を留め將ちて多情を照らさしむ

自注に「女伴の行動は、街を査する巡捕は未まだ嘗つて過問せず」とある。連れだつて夜遊びする若い娘たちを、「倫敦竹枝詞」第19首もうたつていう、

風來陣陣乳花香 風もて来たる 陣陣 乳花(茶を点てる時できる乳白色の泡)の香
 鳥語高冠時様妝 鳥語(意味不明な外国語)せる高冠 ^{はやり}時様の妝
 結伴來遊大巴克 伴を結びて来たり遊ぶ 大巴克
 見人低喚克門郎 人を見れば低く喚ぶ ^{カモン・ラッド}克門郎

門外漢の注に「巴克(park)は、花園を訳言する也。克門郎(Come on, lad!)は、来たりて同行せよを訳言する也。小家の女或いは娼妓の花園に遊ぶ者有り、人を見れば則ち低く克門郎と喚び以つて招徠す」とある。「郎」は若い男で、同じ意味のladの訳だろうが、lord(旦那様)の可能性もある。また「倫敦竹枝詞」第18首では、もう男とカップルになった娘たちをうたつていう、

把臂摟腰兩並肩 ^{うで}臂を把り^と腰を^だ摟き兩つながら肩を並べ
 雙雙踏月畫橋邊 双双 月を踏む 画橋の^{あた}辺り
 孰邪孰正渾難辨 孰れか邪なる孰れか正なる ^す渾べて^わ弁かち難し
 願作鴛鴦不羨仙 鴛鴦と作るを願いて仙を羨まず

門外漢の注に「毎日申酉(午後5時ごろ)以後、或いは礼拝(日曜)日、男女は相い携さえて出遊す。或いは月を街頭に踏み、或いは涼を樹下に納れ、臂を把り頸を交え、昵昵として私語せざるは莫し。其の眷属(夫婦・恋人) ^な為るか、狭邪(男客と娼婦) ^な為るかを ^わ弁かたざる也」とある。またわが中井桜洲の「龍動雜詩」第3首(「漫遊記程」巻下)も公園の遊人をうたつていう、

照路瀛燈燦似花 路を照らす汽灯は燦として花に似たり
 遊人終夜不思想家 遊人は終夜 家を思わず
 騷雨恰先初月歇 騷雨は恰かも初月に先んじて歇み
 緑陰移榻試唐茶 緑陰に榻を移して唐茶を試む



図7 リージェント・ストリート（「回覧実記」巻22）

桜洲の注に「レーゼント街ヲ出テ公園中ヲ歩行スレバ去来ノ遊人雲ノ如ク、汽燈月光ト相映射シ茶店ニ休シテ興ヲ遣ル」とある。ロンドン中心部ウエストエンドを南北に貫く大通り「繁華ナル衝街」たる「レーゼント街」リージェント・ストリート、その北端に広がるロンドン最大の王立「公園」リージェンツ・パークで桜洲が見た光景は清国の詩人とそれほど変わるまいが、詩の風情はかなり異なる。潘らの詩はやはり士大夫としての儒教倫理を背景にしている、遊人の男女をうたうなかに譴責の気分が感じられるが、桜洲のそれは「終夜家を思わず」というものの、それほど深刻でないように見える。

そして、桜洲は「龍動府雜記」（「漫遊記程」巻下）でもロンドンの「風俗習慣ノ弊害」をのべて、「其最モ公然発露スルノ状ハハイドパーク、レーゼントパーク、シントゼームスパーク、サリガーデン及ヒ王宮前面ノ園林はレナリ。是等ノ園中日没ニ至レハ妻娘妾婢媼老弱群ヲナシ男女肩ヲ摩ス。兼テ郵便電信ニ附シ此ノ園中ニ邂逅シ、遊歩徘徊客ヲ誘ヒ情夫ヲ待ツ。甚シキニ至テハ路傍ノ榻上ニ対坐シ、或ハ樹蔭ニ臥ス。月光燈影、行人更ニ怪マス。公然避ケ憚ルナシ。実ニ此園林ヲ設クルノ主意ニ乖戾スルノミナラス、却テ淫犯ノ媒ヲナスノ一相場ト云フ可ナリ」と総括する。

なお、第4句の「唐茶」については、桜洲の初めての渡英の日録「西洋紀行航海新説」巻下、慶応二年（1866）十二月二十日、「キリスタールパレースノ玻璃巨屋」つまり水晶宮を訪れたおりの記述が参考になる。そこには「屋内種々ノ貨物店アリ。戯場モ亦盛ナリ。印度地方ノ人獸ヲ写シテ各処ニ置キ又禽鳥類モ甚ダ多シ。余椅子上ニ小憩シテ地上ノ花木ヲ遊覽ス。時ニ姉ノ友婦ト途ニ逢フ。共ニ園中ヲ散歩シ、演劇ヲ一見シ、茶店ニ休シ、唐

茶菓物ヲ小喫シ、火輪車ヲ買フテ舎ニ帰ル」と「唐茶」が見え、「コーヒ」とルビをふっている。

また「米欧回覧実記」巻2「倫敦府総説」、7月14日には「北方ニハ「レーゼントパーク」ト云公苑アリ、府中最広ノ遊苑ニテ、林樹鬱茂シ、中ニ禽獸苑及ヒ草木苑ヲ設ク」とある。

そして、成島柳北「航西日乗」明治6年5月7日も「又「レゼントパーク」ニ遊ブ。此園ニハ獅子・虎・豹（黒豹アリ）・野猫大ナル獒（猛犬）ノ如キ者・白熊・巨蛇・海牛（ジュゴン）・「ヒツポ、タミ」（河馬）・猿属ノ奇ナル者ヲ始メ、珍禽奇獸算ヘ尽ス可カラズ」と、おもにリーゼンツ・パークの北側に1826年設立された「禽獸苑」動物園を述べる。さらに5月19日、この動物園をうたった「禽獸園」と題する竹枝詞にはいう、

鐵檻劃園豺虎横 鐵檻 園を劃りて豺（山犬）虎横たわり
 踏青士女趁晚晴 踏青（ピクニック）の士女は晚晴を趁う
 誰圖釵影裙香裡 誰か図らん 釵（かんざし）影・裙（スカート）香の裡に
 聽箇空山嘯月声 箇の空山にて月に嘯く（山犬・虎などの）声を聴かんとは

つぎは第十首。

此地方言作正声 此の地の方言を正声と作し
 通商口岸已通行 通商せる口岸は已に通行す
 何期路接巴黎近 何んぞ期さん 路は巴黎に接して近きに
 海面迴風惡浪生 海面に風迴りて惡浪生ずるを

自注に「英の語言文字は歐洲に通行す」とある。後半二句については「使俄草」巻五、三月初四日に「（ロンドンから）九点鐘に車を開き、駛行すること甚だ速く、寒気も亦た未まだ尽とくは退かざる也。……多甫由り（フランスのカレー港まで）海を過ぐるは、奴黒文に較べて稍や数点鐘快し。而るに海潮は兩岸峽に束ねられ、風濤は頗る險しく、価は転たた昂貴たり。未正（午後2時）海を渡るに、北風甚はだ勁く、舟行は揺盪を極む。七点鐘に巴黎に至る」とある。

この「風迴りて惡浪生」じ、「風濤險し」いドーヴァー海峡については、成島柳北「航西日乗」明治6年5月4日の竹枝詞「英仏海峡を渡る」にもいう、

風濤之險世無雙 風濤の險は世に双び無し
 判得天公界二邦 判（判明する）じ得たり 天公の二邦に界する（この海峡を英仏二国の境界とする理由）を
 君見佛郎王若虎 君見よ 仏郎王（皇帝ナポレオン）は虎の若きも

一生不渡此長江 一生 渡らず 此の長江（ドーヴァー海峡をたとえる）を

後半二句は、虎のごとく強かったフランス王ナポレオンも、生涯、この海峡を渡ってイギリス本土に攻め込むことができなかったことをいう。

※ 本論文中の図版は、慶応義塾大学出版会「現代語訳米欧回覧実記」のものを、出版会の御承諾を得て、使用しました。